

集会を終えて

永戸 祐三 (日本労働者協同組合連合会理事長)

6回目を数える今回の協同集会が、本格的なものになってきたということを実感します。最初は、協同を問う集会とは一体何だとか、そんな集会には集まらないとか言われました。しかし、世の中に協同を渴望する人は必ずいるはずだ、そういう人が集まればいいのではないかということをやってきましたが、今回の東北集会は、いろいろな地域で目的性や自覚をもった人たちの広い集まりになっていると感じました。

また、アメリカから全米退職者協会のパーキンス氏に来ていただいたき貴重なお話をうかがうことができ、そして10年来ラブコールを送っていた井上ひさし氏にもきていただくことができました。これは労働者協同組合という考え方が、地に足を着けた本格的な歩みになってきたということの一つの到達点だろうと思います。

集会での話を聞いていて、ますます「協同」が大きな価値をもって社会づくりが行われていくだろうという気がします。95年というのは大きなターニングポイントであったと後の社会からいわれる年なのではないかと思っています。神戸大震災、オウム、沖縄。この時人間の輝く命というものを一体誰が守ったか。誰が人間の命を育む存在だったか。国だったのだろうか。安保条約だったのだろうか。こんなことが繰り返されてはたまらないと、家族の説得を振り切って告発をしてくれた少女。オウムに惨殺された坂本弁護士は、誰にもたよれない人のために弁護士はあるのだと強い信念をもって告発を続けた。阪神大震災で命を助けたのは、近隣の命そのものであったし、全国の善意ではせ参じた人々であった。ここには勝者も敗者

もない、命を輝かせたいという人の心からの行為そのものでした。

首相の諮問機関である経済審議会が新しい日本社会のあり方を出しました。それによると扶養手当はなくなります。有料職業紹介も解禁、金融持ち株会社も解禁だという。これは改めてこの社会に勝者を作り、圧倒的な人間を敗者に仕立て上げる。そのことによってしか日本の資本主義社会は活力を持たないと言ったに等しい報告です。このことをレスターサロー博士は「勝者総取りの社会」だといっています。

資本が奪い尽くす経済が始まると言って来ましたが、そのアンチテーゼとして我々は地域から何を作ろうとしているのか。「協同」は人間社会の中に勝者・敗者を想定するだろうか。お互いの違い、強さ弱さを認め合って生きていこうというのが人間社会ではないのか。どの分野からもこの思想が言われ始めていますし、その声が力になり始めたことが今回の集会の参加者の実感であったのではないかと思います。生活者自身が新しい福祉社会の創造を仕事と運動の中心にすえなければならぬのではないのでしょうか。その地域版を我々が創ろうとすればもっともっと幅の広いネットワークを協同の心をもって創り上げていかなければならないと思います。そのための糧を、この集会で深めることが、実りあるものにしていくのだと思います。

(第1日目全体集会の閉会挨拶より まとめ：編集部)